

山口西田読書会（第 196 回）2019 年 4 月 20 日
第 195 回（平成 31 年 4 月 13 日開催）のプロトコル

1. テキスト

「内部知覚について」78 頁後ろから 5 行目から 81 頁 8 行目まで。

2. テキスト要約

マイノングは「内部知覚」において「知る者と知られる物」が一となる、あるいは「対象が対象たる性質を失わないで、内容の位置に来る」という。これを『善の研究』にある例に即して説明するならば、音楽に没頭して聞いているときに「音楽を聞いている」という「意識現象」とそれに気づいているという「知」とがピタッと一つになっている、ということである。この場合「意識現象」が「知られる物」ないし「対象」であり、「知」が「知る者」ないし「内容」である。（ただしこの「知」「内容」はそこから無限の判断が成り立ち得る、どこまでも分からないものである。）「対象」を見るというのは目が外に向くということである。これに対し「内容」の方は目の中にある。そこで西田は「内容が内在的なると共に超越的な意味を有つ」ことがいかにして可能かを問題にする。外を見ながら内にあることがどうして可能か、という問いである。

ここで西田は伝統的な真理概念に遡って考察する。「物を知るとは如何なることか」、このように始める。「普通には、物と我と対立し、何らかの意味において私の内に物を写すことによって、物を知る」とされ、「真理とは知識の内容とその対象の一致」であるとされる。この定義に従うならば「内部知覚」における「知る者」と「知られる物」の一致は真理の核心を成すはずである。ところがそこに西田は疑問を投げかける。その際「時」を持ち出す。「現われたものは既に過去に属する」、「我々は何時でも現在を捉えることができない」ではないか、と。そうすると「知る者と知られる物の一致」ということも、じつは「知られる物（対象）」という意識現象に「知る者（内容）」が直ちに連続しているという「直接の連続」に過ぎないことになる。しかしここでさらに西田は問いを發する。「同一の意識」がなければ「直接の連続の意識」も成り立たないではないか、と。ピタッと一つになっている（同一）ということが分からなければ、二つのものがピタッとくっついて連続しているということも分からないではないか、ということである。

こうして「過現未」という「時の連続」からすれば、「現在」は達することはできないが、しかしこの「現在」がなければ「時の連続」が成り立たない、というジレンマに陥ることになる。西田はこのアポリア（難問）を「対象の意識と作用の意識とを区別する」ことによって解決しようとする。そうしてこのように言う。「現在の我は対象として知ることができないが、働く我として我は直に我を知ることができる」。

ここで我々は先に「一」で西田が挙げたデカルトの「*cogito ergo sum*」に対する西田の解釈を思い起こすべきであろう。「現在の我は対象として知ることができない」。したがって「現在の我」は対象的な仕方では「有る」と言うことはできない。しかしそのように対象化する働きにおいて、「作用の意識」が厳然として「有る」ではないか、これが西田の解釈であった。我々はここを決して簡単に分かってはならないように思う。まず「対象の意識」と「作用の意識」の「意識」の意味が違う。「対象の意識」という場合の「意識」は反省である。これに対し「作用の意識」という場合の「意識」は直観である。また「有る」も「直観」による「有」である。したがってもし我々がここで普通の意味で、つまり対象的な意味で「自分が有る」ということをイメージしたら、そのような自分は有りはしない、ということである（しかも我々は自分ではそのようにイメージすることしかできない！）。直観の「有」はこうした徹底した否定を通してのみ成り立つ（この否定も人間は自分では為しえない！）。「作用の意識」としての我は「真の自己」であるが、それも否定を通してしか直観されない。徹底した「我なし」と一体である。それは同時に無限の判断の源泉となるどこまでも分からないものである。しかし日常的な我にとってそれは直視できない不安の対象でしかない。これが「純粹経験」の核であると思うが、我々はこうしたものを考える際には常に最大限の謙虚さを持つことを決して忘れてはならないだろう。

西田は先の文に続いて次のように言う。「現在というのは時の連続に於ける一つの極限点である。極限点の認識は立場の超越によらねばならぬ、作用が作用自身を知ることによ

って可能となるのである」。この立場の超越とは「反省」から「直観」への超越、転換のことである。「作用が作用自身を知る」における「知る」ももちろん直観である。

こうして我々は現在において「知る者」と「知られる物」の「同一」を直観するのであるが、この「同一」の直観について西田はプラトンのイデア論を引き合いに出す。我々は決して真に同一なるものを対象的に知ることではない。しかしそのように「知ることはない」と言った時に既に「理念（イデア）」として「同一」を知っていなければならない、というのである。この「知る」ももちろん直観である。我々は「現在」においてイデアを知るのである（判断はイデアの「想起」ということになるだろう）。

かくして「達すべからざる現在」と「直接の継続によって知り得た過去」は「反省することのできない直接経験」と「判断によって認識せられた知識」の関係になり、前者がなければ後者が成り立たないということになるのだが、「カント学派の人々は体験は認識以前なる故に知ることができないと云う」。こうした「不可知的なる体験」から時空とカテゴリーによって認識が成立するとするのである。しかし西田は「不可知的なる体験が如何にして知識に確実性を与え得るか」という疑問を投げかける。「この花が赤い」という判断の確実性は「直接経験の内容」すなわち直観なくして成り立たない、というのである。

哲学的問い

「この花は本当に赤いのか」